

国有林野 事業の取組

関東森林管理局

「オオタカの舞う豊かな水源の森を目指して」 ―生物多様性の保全と持続可能な利用の推進―

わが国の国有林には、貴重な動植物が生息・生育する森林や、地域を代表する森林生態系として保存すべき貴重な森林が多く存在します。林野庁では、こうした森林を「保護林」に指定し、それぞれの保護の対象に応じた保全・管理を行っています。関東森林管理局では、このような保護を特別な目的とした取組に加え、新たに、群馬県内にある二千餘の国有林を対象に「オオタカモデル森林」を設定し、生物多様性の保全とその他の森林が有する機能の総合的な発揮を図るための森林づくりを進めていく考えです。

オオタカ保護のための取組

オオタカは希少な鳥類であり、食物連鎖の上位に位置する、いわゆる「アングレラ種」として生物多様性の指標

となりますが、人工

林地帯にも数多く生息しています。このため、伐採など森林の取扱いに当たっては、オオタカの生息環境の維持・向上に向けた森林施業が

必要となるケースが多く生じます。

関東森林管理局では、これまでにオオタカと森林施業に関する調査研究を進めており、その成果は出版物として発刊されています。間伐等の予定箇所においてオオタカが確認された場合は、本調査研究の成果を活用しつつ、有識者の意見も聴きながら慎重に事業を実施しています。

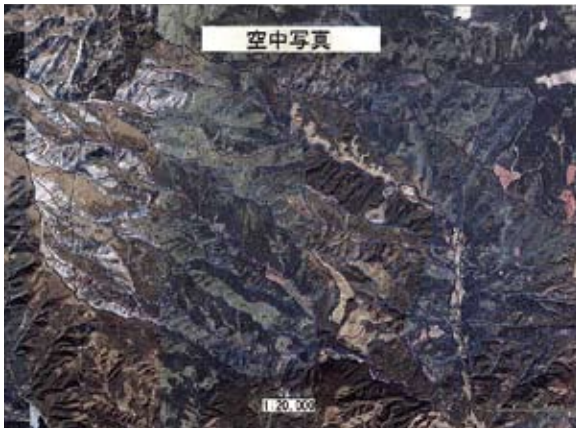
今後、これまでの調査研究の成果をまとめたエリアの森林に適用し、長期的視点に立って、オオタカの生息環

境の改善にも寄与する森林施業を体系的に実施・検証するモデルの構築に取り組んでいきます。

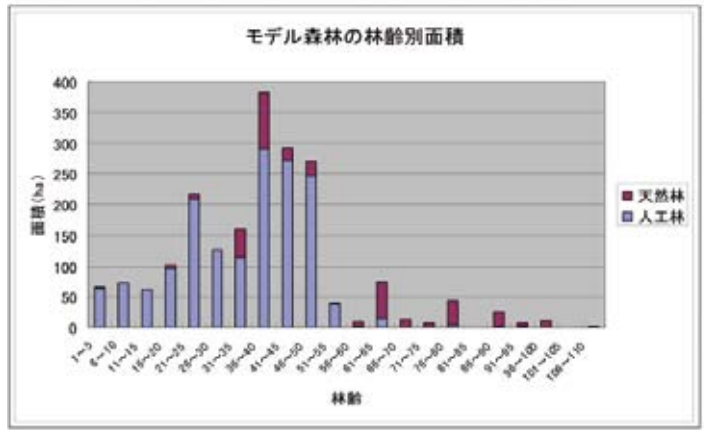
モデル森林の概況

モデルの対象となる森林は重要な水源地域であり、スギ・ヒノキ等の人工林が八割を占め、林齢は四〇～六〇年生が中心となっています。今後、間伐等の適切な実施により森林の健全性を確保しつつ、木材の供給基地としての役割を





空中写真



果たしていくことが期待されます。また、人工林の中には、溪流沿いにあることから水辺の生態系として多様化を図るべき箇所や、当初期待したような成長をしない箇所もあります。

一方、このエリアにはオオタカのペアが生息していますが、繁殖の成功率が低く、通常に比べて行動範囲も広いことから、生息環境としてはあまり良好ではないと考えられます。これは、低木層や広葉樹が少ないことに加え、近年は皆伐をほとんど実施していないために開放地が減少しており、こうした環境を好む野鳥（オオタカの餌）の生息数が少ないことが影響していると考えられます。また、人工林の立木密度が高いためにオオタカが林内を飛ぶことができず、餌を採る林縁（壮齢の森林と開放地の境）が少ないことも、餌場環境としては良好とは言えないようです。

モデル森林としての取組

こうした現状から、人工林について、下層植生の充実にも着目した間伐の計画的な実施に加え、溪流や尾根沿いなどの箇所（人工林の四分の一程度）を広葉樹林へと転換していくほか、主伐

時の林齢を八十年と高く設定し、小面積の皆伐を計画的に行っていく考えです。また、オオタカの営巣候補木は保残・育成していきます。これらにより、木材を継続的に生産しつつ、一定のエリア内に、様々な林齢や樹種、構造を持つ森林をモザイク状に配置していきます。オオタカの餌となる多様な野鳥等の生息環境の造成・維持と、人の生活に必要な資源（水・木材）の持続的な供給を両立させようとするものです。

本年度は、これを体系的に進めていくため、国有林の管理経営に関する計画において具体的な取扱いを定める考えですが、理想の姿に誘導していくためには少なくとも数十年はかかるでしょう。その間、実績に裏打ちされた知見を蓄積し、必要に応じて方向を修正しつつ、生物多様性の保全と資源の持続可能な利用の両立という理念に沿ったよりよい森林づくりを進めていくことが望まれます。このため、有識者からなる検討委員会を設置し、森林の変化やオオタカの行動等を継続的にモニターして取組の成果を評価していくこととしています。



発信機を装着したオオタカ